

広島県における末梢血塗抹標本の染色に関するアンケート調査報告

◎西村 龍太¹⁾、塔村 亜貴¹⁾、河野 浩善²⁾、井上 礼子³⁾、又賀 史織⁴⁾、坂本 美智子⁵⁾、宮本 一代⁶⁾、中村 友紀子⁷⁾
広島赤十字・原爆病院¹⁾、地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立広島市民病院²⁾、県立広島病院³⁾、地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立安佐市民病院⁴⁾、広島市医師会臨床検査センター⁵⁾、公立学校共済組合中国中央病院⁶⁾、広島大学病院⁷⁾

【はじめに】末梢血の細胞形態を観察するうえで重要なことは、観察に最適な塗抹標本を作製することである。末梢血塗抹標本の染色に関しては日本臨床衛生検査技師会血液形態検査標準化ワーキンググループの「血液形態検査に関する勧告法」(以下、勧告法)に一部記載があるものの、染色液の濃度、染色時間等の詳細な記載はない。そのため、標準化には至っておらず、染色方法は各施設に一任されているのが現状である。そこで標準化の第一歩として、広島県臨床検査技師会では、広島県内各施設の末梢血塗抹標本の染色について、現状を把握する目的でアンケートを実施した。【対象】広島県臨床検査技師会登録の全医療施設(190施設)を対象とした。【方法】アンケートは自由参加とし、郵送による全数調査を実施した。アンケート内容は、末梢血塗抹標本の作製方法や染色方法など、計25項目とした。【結果】アンケートの回収率は55.8%(106施設/190施設)だった。主な結果を抜粋すると、標本作製方法ではウェッジ法が88.4%と多く、スピナー法のみは3.5%、ウェッジ法とスピナー法の併用は7.0%だった。染色方法は上乗せ

法38.1%、浸漬法22.6%、自動染色装置10.7%、上乗せ法と別の方法の併用22.6%だった。染色はメイグリユンワルド・ギムザ染色77.4%、ライト・ギムザ染色9.5%、ライト染色11.9%であった。リン酸緩衝液の濃度については1/150mol/L69.1%、その他20.2%であった。水洗は精製水使用29.8%、水道水使用66.7%だった。また、染色液の濃度や反応時間においても施設間差がみられた。【考察】広島県の調査では、標本作製方法はウェッジ法で、染色方法はメイグリユンワルド・ギムザ染色が最も多く、約9割が勧告法の推奨する染色方法で実施されていた。しかし、リン酸緩衝液の濃度は、勧告法の推奨する1/150mol/Lで使用している施設が約7割に止まった。また、染色液の濃度や反応時間も施設によってさまざまであった。原因としては、学会や文献等で染色に関する具体的な記載がなく、標準化されていないことが考えられる。今後は未染の末梢血塗抹標本を配布し、各々の施設で実際に染色する染色調査を実施し、染色性の標準化を目指していきたいと考えている。

連絡先 082-241-3111(内線2506)